

アメリカの創価学会

SGIにおける供給と需要の問題 (一)

フィリップ・ハモンド

栗原淑江 訳

本日の講演は、マハチエタ博士と私が分業で行うことにいたしました。マハチエタ博士の方からは、本書の内容についての話があります。私は、本書が出版に至った経緯についてお話ししたいと思います。実際、書籍が出版されても、ふつうその経緯は書かれていないものです。それで、今回の出版に当たり、ぜひその経緯を聞いていただきたいと思っておりますので、これからお話しさせていただきます。

そもそもは、マサチューセッツ州ケンブリッジにある、ポストン二一世紀センターのヴァージニア・スト

ラウス所長との会話から始まりました。ストラウス所長が手紙をくださり、サンタモニカにある全米本部に行く機会があるけれども、その際に私を訪問してもよいですかとたずねてきたのです。サンタモニカは、私の住むサンタバーバラからは一六〇キロほど離れています。もちろん、私は、「来てください」と答えました。

私には、所長がどのような話でいらっしゃるかはおはわかっていました。つまり、所長の希望は、ブライアン・ウィルソン博士とカレル・ドベラー博士がイギ

リスSGIで行ったと同じような、SGIメンバーに関する調査研究を、アメリカのメンバーにも行って欲しいということでした。

調査を十分に行うには経費が必要なので、私は率直に、どのくらいの予算を考えていらっしゃるかたずねました。予算の規模をうかがった後、いろいろな印刷所に問い合わせ、郵便で出す質問票の印刷コスト等の見積もりを取り始めました。私には、質問票の長さがどのくらいになるかの見当がございましたし、郵送料がどのくらいかかるかも見積もることができました。このように、調査研究というのは、ときには地道で手間のかかるものなのです。見積もりをした結果、一、二〇〇通の質問票が出せることがわかりました。

ポストン二一世紀センターからいただいた予算に関しては、まずはアシスタントをとめてくれたマハチエタ博士、そして、作業を手伝ってくれた大学院生に支払いました。また、質問票を作成する費用に当てました。私自身は、この調査研究によって一銭もいただいておりません。それは、私が利他的だからというわ

けではないのです。調査を行うときに、調査対象の団体から予算が出ていますと、調査者は批判にさらされかねません。私は、そういったことを避け、中立性をできるだけ確保したかったです。ちなみに、私たちは、この研究の客観性について、今まで異議を唱えられたことはありません。

調査の第一歩は、サンタバーバラ地域のアメリカSGIの幹部の皆さんにお会いし、会館を訪問することでした。その後すぐに、少人数で行われるグループ・ミーティングに招待していただきました。そこでわかったことは、アメリカSGIには、通常の宗教団体が持っているような名簿がなかったことです。サンタバーバラであれ、カリフォルニア州であれ、全米であれ、アメリカSGIの会員数を誰も答えることができませんでした。

ところが、アメリカSGIは、四種類の出版物を発行していることがわかりました。二つが英語版、二つが日本語版ですが、その予約購読者リストがあり、サンタモニカにあるアメリカSGI本部の許可があれば、

それを用いることができることがわかったのです。それで、幹部の方に話をしたところ、使用を快諾していただきました。

予算上、質問票の数が一、二〇〇通ということはすでにお話ししました。そこで私たちは、これらの予約購読者リストの中から、無作為に一、二〇〇名を抽出しました。その際、少なくとも一つのリストに名前が載っていたら、アメリカSGIの適格なメンバーであると考えました。質問項目の種類については、私たちにはよいアイデアがありました。質問は、分かりやすく簡潔にすることをめざし、作業を進めました。質問票の最初の原稿ができた段階で、まずはサンタバーバラ地域のメンバーに見てもらい、次いでサンタモニカの幹部の人たちにも見てもらいました。

一九九七年四月には、一、二〇〇項目の質問を掲載した一、一八五通の質問票を発送し、一カ月以内に二〇パーセントの人から回答を得ました。その後六週間では、一〇パーセントの人から回答がありました。合計、三〇パーセントですが、それしか返ってこなかったとい

うことで、私たちはとても危惧しました。というのも、今までの調査の場合、だいたい回答率は六〇〜七〇パーセントだったからです。

二カ月半たっても三〇パーセントしか返ってこないということ、今度はハガキを同封した手紙を発送しました。手紙には、「もし質問票を紛失してしまつて、もう一度郵送して欲しいということであれば、再発送いたします」と記しました。また、どちらにせよ質問票に答えるつもりはないという人もいるだろうと想定し、ハガキだけで答えが出せるように、三つの質問を書いておきました。創価学会をはじめ知った時期について、その人の民族的背景について、そして活動の関与度のレベルについてです。その結果、五四通のハガキが返送されました。

一九九七年八月末で質問票の回収を締め切り、分析の段階に入りました。最終的な回収率は三七パーセントでした。通常のアンケートと比べてとくに低いというわけではありませんが、私たちが期待していたよりはかなり低い数字でした。そこで、とても深刻な問題

が生じました。すなわち、一、一八五通出したうちで三七パーセントしか返ってきていないのに、回答者の代表性が確保できているのかどうかという問題です。そこで、返送されてきたサンプルの代表性を査定するために、私たちは次の三つの方法を用いました。

第一の方法は、予約購読者リストに載っているすべての人について、すでに私たちが三つの情報を持つていたことに基づきます。そこに掲載された住所によって、その人がアメリカのどの地域に住んでいるかがわかりました。また、名前から性別がわかりました。そして、ほとんどの人について、アジア系の人かどうかがわかったのです。

それで、この予約購読者リストに表れている代表性と、戻ってきた三七パーセントの代表性を比べてみました。すると、次の三つのことが判明しました。まず、地域については、一〇〇パーセント一致していました。予約購読者リストと三七パーセントの回答者の間に、まったく相違はなかったのです。アジア系か否かについても、同じことがいえました。性別については、予

約購読者リストの場合、男性の割合は三二パーセントであるのに対し、回答者では三二パーセントでした。ということ、この第一の方法からすると、代表性は確保されていたのです。

第二の方法は、質問票には答えなかつたけれども、三つの質問には答えてくれた五四通の情報でした。第一に、SGIに関わった時期については、三七パーセントの回答者とまったく一致しました。次に、アジア系か否かという点については、ハガキを返送してきた人には、アジア系の人が多くなっていました。最後に、関与の度合いについては、関与の度合いの低い人が多くなっていました。これは、驚くことではありません。これを、全サンプルと三七パーセントの回答者を比べますと、回答者の中にアジア系のメンバーが少なく、関与度の高い人が多いという違いがありました。

第三の方法は、いくつかの想定を含んでいました。この点については、明らかにする必要があります。というのも、この想定が受け入れられるときにのみ、私たちの分析は信頼に足るものと考えられるからです。

私たちは、それぞれの質問票について、回答を受け取った日付を記録していました。ですから、一人一人について、この人は早い時期に回答してくれたのか、それとも遅れて回答してきたのかということがわかりません。私たちの想定とは、次のようなものです。すなわち、少なくとも、早く返してくれた人と遅く返してくれた人との違いは、遅く返してくれた人とまったく回答しなかった人との違いと同じだということです。この方法によって、第二の方法での発見、すなわち、アジア系のメンバーと関与度の低いメンバーの代表性が低いことが確認されたのです。

アジア系のメンバーの代表性が低いことは、私たちにとつて残念なことでした。また、関与度の低いメンバーの代表性が低い点については、次のように考えました。つまり、最終的に私たちが知りたかったのは、一人一人のメンバー個人についてではなく、アメリカ SGI 全体としての特質、文化、活動でした。このような組織全体としての活動や文化というのは、どちらかといえば関与度の高いメンバーにこそ反映されてい

ます。それで、関与度の低いメンバーの代表性が低いという問題は、それほど深刻なものとは考えなかつたのです。

さて、質問票の最後で、私たちは次のような質問をしました。「回答者の匿名性は厳密に守られますが、もしあなたが電話によるインタビュにに応じてくださるならば、電話番号と、連絡に都合のよい時間帯を教えてください」と。すると、驚くべきことに、六三パーセントの人がそれに応じ、情報を寄せてくれたのです。私たちは、回答をもとにデータの分析を行い、メンバーを関与度の高いメンバーと低いメンバー、そして、もしかして退会するかもしれないメンバーの三つに分けました。そして、三グループの中から合計四〇〜四五名をピックアップし、電話インタビュを行いました。それによって得られた情報につきましては、マハチェク博士が次に話してくださいましょう。

こうして、私たちは一九九八年の春までにデータの分析を終え、その夏に執筆を行いました。オックスフォード大学出版局との話では、原稿締切りは一九九八

年十月一日ということでしたが、それより一カ月早く提出することができました。そして、イギリスでは一九九九年三月に、アメリカでは五月に、『アメリカの創価学会』(Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion) が出版されたのです。

(フィリップ・ハモンド)

カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授
(訳・くりはらとしえ／東洋哲学研究所研究員)

(本稿は二〇〇〇年四月二十四日に行われた、当研究所主催の特別公開講演会における講演内容に、加筆していただいたものです。)